第３８回福岡県美しいまちづくり建築賞　受賞作品概要

大賞　住宅の部

「井堀の家（産後ケアハウスsheep）」

設計趣旨

　住宅街の中に建つ小さな産後ケア施設を併設した店舗兼用住宅である。産後ケア施設とは育児中のお母さんが求めるケアを助産師が提供する施設である。育児、授乳相談、食事やゆっくり時間の提供を助産師である奥様自身が行っている。平日は夜間もゲストが滞在するため住宅と施設は中庭を挟んだ構成としている。とはいえ扉一枚で繋がっているため住宅のダイニングでゲスト同士のランチ会やママさん教室などのイベントが行われることも。住宅としてのプライバシーの確保をしながらも利用状況に応じて都度柔軟に使えるゾーニングとしている。ゲスト滞在中は中庭側に開くことは難しいので中庭側上部の窓や裏庭からも空や緑を感じられるように配慮している。なお施設の営業は平日のみであるため週末はご家族が中庭で食事をとるなどゆっくりとした時間を過ごされているようである。

　外観はプライバシーの観点から閉じたボリュームとしているが奥へと伸びるアプローチにより「抜け」を作り圧迫感を抑えるように配慮している。外壁は小国杉によるボード&バテン貼りとすることで陰影のある豊かな表情として、自然素材の経年変化と共に地域に馴染んでいくことを期待している。

大賞　一般建築の部

「風のオフィス」

設計趣旨

　生物や植物の調査を主たる業務とする「エコプラン研究所」がキーテナントとして入居する住宅街に建つオフィスの計画である。研究所のメンバーの話はいつも興味深く、この仕事の魅力をぜひ地域の子どもたちにも知ってもらいたいと考えた。さらに、環境を考える会社が住宅地のオフィスから自然環境への実践を行うことで、近隣住民が環境について考えるきっかけになると考えた。

　建物の配置を決める過程で敷地形状を読み込むと、六角形の通り芯を配置していくと馴染みがいいことがわかった。オフィスの用途に対応するため、上下階で異なる方式の六角形の木架構が生まれた。また、敷地は住宅街の高台に位置しており、気持ちの良い風が吹き抜けることが予測できた。そこで、実験を行い強風が吹いても書類が飛ばないような「風量調整建具」を開発した。この「風量調整建具」とガラスが入った建具の開口幅の調節で、幅広い気候条件下で自然風を取り込むことができ、地域の環境とより近く接することができる。

　オープンハウス時には隣接する高校の先生や生物部の生徒も沢山きてくれた。今後、この建築を通じて近隣地域の住民に環境に対する意識が少しずつ浸透していくことを願っている。

優秀賞　住宅の部

「福岡の住宅」

設計趣旨

　福岡県福岡市内の閑静な住宅街に建つ戸建住宅の新築計画である。クライアントは東京の企業に勤めるフルリモート勤務の夫婦であり、二人の生活の大部分は住宅の中で完結する。そのため、働くことと休息の明確な境界を持たず、自由に生活の場面が切り替わる柔軟で複層的な空間が求められた。

　空間をあらかじめ用途で固定せず、光や風、眺望といった空間の性質に着目して、場所ごとの可能性を引き出そうと考えた。三層吹き抜けの明るい大きなボリュームに対して、小さな空間がニッチ状に取りつくように配置されている。小室内は立体的に散りばめられ、屋内外や回遊動線によって緩やかに連結されている。居住者は日常の中で常に異なるスケールと性質の空間を横断しながら、多様な居場所をその時々の気分や活動に応じて選択できる構成となっている。

　建物全体は統一された一つの箱ではなく、小さな空間が集積し、階段や吹き抜けが路地や坂道のように機能する「小さな街」のような住宅を目指した。用途を固定化しない柔軟な空間の重なりが、働くことと暮らすことの境界が融解していく現代の住まい方に新たな可能性を提示している。

優秀賞　一般建築の部

「嘉麻市立稲築東義務教育学校」

設計趣旨

　ひとづくりの場となる義務教育学校

　嘉麻市は炭鉱閉山後の人口減少と少子化が進む中、地域活性化の核となる学校の役割を重視し、市内3校区を同時に整備した。子ども達の学習環境の創造とともに、「まちづくりは、ひとづくり」という市の想いを込め、子どもと大人が共に学べる「ひとづくりの拠点」となる学校を目指した。計画では、文部科学省が掲げる「新しい時代の学び」に応える多様な学習空間の整備、デザインビルド（DB）方式によるローコスト化と短工期の実現、木質化による子ども達の豊かな生活環境の提案が求められた。

　学校の中心に、全学年が利用できる学びの場として「メディアコモンズ」を計画した。上下階をつなぐ動線を兼ねることで空間効率を高めながら、異学年や教職員との自然な出会いを生む場となっている。オープンな図書スペースの周囲に特別教室を配置し、「本と専門教科がつながる学び」を促進する構成とした。さらに、子ども達の生活拠点として学年ごとに独立したクラスルームユニットを計画し、学年活動や連携が行いやすい環境とした。DB 方式を最大限に活かし考案した「LVLプレキャスト化粧型枠」は、構造・意匠・施工・コストのメリットを生み出し、教室の無天井化による安全性の確保と階高縮減による周辺地域への日影、圧迫感軽減に配慮した。

優秀賞　一般建築の部

「石橋医院」

設計趣旨

福岡県柳川市に計画した創立１００年を迎えた歴史ある診療所である。

建主はかつて沖縄県竹富島にある竹富診療所で、島民と共に島の健康づくりを推進し、地域医療を支えてきた医師である。

先代が守り続けてきた診療所を引き継ぐにあたって、自分の生まれ育った柳川の自然、歴史や文化を守り継ぎたいと願う建主は、「かかりつけ医」として、地域の人びとの予防医療と健康づくりを支えると同時に、気軽に集える場所としても開かれた地域医療の拠点となる建築を望まれていた。

計画地は柳川市内の中心部に位置し、まちの主要な幹線道路と、旧柳川城下にめぐらされたお掘りに面した、まちとお掘りをつなぐ場所であり、間口１５ｍ・奥行き４０ｍの細長い敷地形状である。

水平な大屋根を持つ平屋建ての建築は、沿道の町並みに面した５．０ｍある深い軒下空間を持ち、お迎えを待つ患者さんや人びとの日々の交流を受け入れる場として地域に開かれている。平面計画は奥行き方向５．５ｍのスパンで構成され、西側半分には診察室や処置室、バックヤード等の医療空間を集約させ、医療スタッフの動線をコンパクトにする事で、質の高い医療行為を提供できるように配置している。一方、東側は沿道とお掘りをつなぐ開放的でのびやかな待合空間となっており、地域の人びとが集える場としている。

５．２ｍ跳ね出した屋根とガラスのみで構成された待合空間は、沿道からお掘りまで３６ｍにわたって無柱空間が続き、３．５ｍの開放的な天井高さによって、庭の草木や花といった自然、陽の光や四季の移ろいを身近に感じながら過ごすことができる。

お掘りの側に配置された「くらしの保健室」は、建主の理想とする、食を通して保健・栄養指導が可能な調理スペースを設けており、柳川の川下りの風景と共に医療と地域コミュニティが育まれる場を創出した。

建主が取り組む「健康づくり」の場が、地域の人びとに寄り添える地域医療の拠点として、柳川の人びとの心の拠り所となることを願っている。

福岡県建築住宅センター理事長賞
（リフォーム・リノベーション）
「Seseragi（せせらぎ） プロジェクト」

設計趣旨

秋月は福岡県中部、古処山の麓に位置し、三方を山に囲まれた谷間に形成された歴史的集落である。中世には秋月氏が山城を構え、近世以降は黒田氏による城下町として整備され、「筑前の小京都」とも称される独自の景観を保持してきた。江戸時代の町割りや水路網、武家屋敷、町家、石垣、そしてかやぶき屋根の民家などは、近代化から取り残されたがゆえに奇跡的に現存している。

しかし、近年は人口減少や建物維持の困難化、空き家や駐車場の増加、景観を損なうインフラの導入など、町の風景は徐々に変わりつつある。私たちが手がけた「Seseragi プロジェクト」は秋月全域に絶え間なく流れるせせらぎへのオマージュであるが、まち中で起こり始めているこれらの問題への抗議でもある。

このプロジェクトは街道と野鳥川を結ぶ敷地に建ち並び、建物の隅々と庭との間に、空間の流れを形成している。通りに面したお好み焼き屋だった町家。思い出が詰まった伝統建造物の蔵。江戸時代から残るかやぶき屋根の民家。そして川岸にへばりつく古民家。これらの建物を素直な視点から改修し、柔軟なプログラムを設けることで、見捨てられた場所を再生させるだけでなく、互いに、そして周囲の自然ともつながっていく。 例えば、ゲストハウスで作家を受け入れ、秋月街道に面した展示スペースでギャラリーを開く。付属してイベントを行う場合は隣で社交の場を提供したり、川を超えたシェアオフィスで共同制作を行う。新たな空間やプログラムは単独で機能するだけでなく、必要に応じて一体となり、住民の交流や外部の人々を迎え入れる場となる。街道や川に沿って灯された空間や、かつての輝きを取り戻した伝統的なファサードはせせらぎがまちに齎す影響と重なる。せせらぎのように、騒がしすぎず、常にそこにあり、周囲の環境に生を与え続けている。

福岡県建築住宅センター理事長賞
（リフォーム・リノベーション）
「ミリカローデン那珂川（なかがわ）」

設計趣旨

那珂川市の音楽ホール・図書館・生涯学習センター・記念館・エントランスホールによって構成される複合文化施設30年目のリニューアル。エントランスホールを各施設がつながるための中心として提案し、施設全体を図書によって繋ぐことで、この場所が街にとっての中心となり市民みんなの居場所となることを目指した。

まずはじめに、施設にたくさんの居場所をつくるため、スタッフ総がかりで100を超える居場所のスケッチをした。たくさんの過ごし方をデザインすることで、できる限り世代や性別を問わず多様なリクエストにこたえることができる施設を目指した。また、全てが図書館というテーマのもと、施設全体に本棚が散りばめられており、どの場所でも興味のキッカケに出会うことができる。

シンボルであるミリカの木は大学、大工、製材所、構造エンジニアが一緒になりデザインを検討し、九州でも屈指の那珂川市の市産材を用いて制作した。実際に触れて、那珂川市の豊かな自然と時間の積み重ねを感じてもらいたい。

このような市民にとってのサードプレイスがまちへの愛着や誇りにつながり、まちづくりへの市民参画を促すはじめの一歩になることを期待している。